

平成28年度第 2 回
東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
評価部会

平成29年 2 月 1 日（水）

午後 2 時00分開会

富岡文化施設担当課長：それでは、皆様おそろいですので、始めさせていただきます。

改めまして、本日は皆様、大変お忙しい中、御出席いただきまして、どうもありがとうございます。

ただいまから「平成28年度第 2 回東京都現代美術館美術資料収蔵委員会評価部会」を開催いたします。

私は、東京都生活文化局文化振興部文化施設担当課長の富岡と申します。本日は司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、本日出席いただきました委員の皆様を紹介させていただきます。

私の向かって左側から順に紹介させていただきます。

まず、蔵屋美香委員でございます。

蔵屋委員：よろしくお願いいたします。

富岡文化施設担当課長：続きまして、小山登美夫委員でございます。

小山委員：よろしくお願いいたします。

富岡文化施設担当課長：佐谷周吾委員でございます。

佐谷委員：よろしくお願いいたします。

富岡文化施設担当課長：前山裕司委員でございます。

前山委員：よろしくお願いいたします。

富岡文化施設担当課長：南雄介委員でございます。

南委員：よろしくお願いいたします。

富岡文化施設担当課長：なお、本日、大田委員、白石委員は御欠席でございます。

続きまして、事務局職員を紹介いたします。

まず、東京都現代美術館副館長の馬神でございます。

馬神副館長：馬神でございます。よろしくお願いいたします。

富岡文化施設担当課長：同じく東京都現代美術館事業推進課長の北條でございます。

北條事業推進課長：北條です。よろしくお願いいたします。

富岡文化施設担当課長：東京都現代美術館事業係長の牟田でございます。

牟田事業係長：牟田でございます。よろしくお願いいたします。

富岡文化施設担当課長：よろしくお願いいたします。

続いて、お手元に配付しております資料の確認をさせていただきます。

まず、一番上に会議次第がございまして、その下に資料 1 として美術資料収集方針がございまして。

続いて、資料 2 としまして、A4横の収集候補作品一覧表がございまして。

資料 3 として、同じくA4横で作家・作品説明書がございまして。

資料 4 で、A4縦になりますが、収蔵委員会設置要綱がございまして。

資料 5、評価部会委員名簿がございまして。

最後に、A4判の評価部会の評価表、A4横の1枚物がございます。

不足などはございませんでしょうか。

本日の資料につきましては、評価部会終了後、回収させていただきますので、机上に置いたままにしていいただければと思います。

今回の評価対象資料の価格評価に関する議事ですけれども、東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱第11の規定によりまして、非公開となります。

当部会の議事録につきましては、作品資料収集が決定した後に公開と予定してございます。公開に当たりましては、委員の皆様事前に、例えば個人情報など、何か公開に差しさわりのある内容がないかどうか、追って確認させていただきたいと思っております。

それでは、議事に入ってまいります。

本日、審議をお願いする収集作品の説明をお願いいたします。

馬神副館長：それでは、収集作品について御説明いたします。

本日、審議をお願いする作品は、購入が3件、寄贈が6件でございます。これら作品の収集につきましては、午前中に実施いたしましたコレクション部会で承認されております。

作品の詳細は、事業係長の牟田及び担当学芸員より御説明いたします。

牟田事業係長：それでは、個々の作品の御説明に入らせていただきます前に、資料1「東京都現代美術館美術資料収集方針」につきまして、いま一度御説明させていただきたく存じます。

まず「東京都現代美術館美術資料収集方針」の「1 方針策定の趣旨」でございますけれども、「21世紀の美術文化を担う東京都現代美術館の美術資料収集に当たって、その方針を定め、首都東京、国際都市東京の美術館にふさわしい美術資料の収集を図り、常設展示の一層の充実を目指す」。

「2 収集の基本的考え方」でございますが、

東京都現代美術館は、内外の現代美術を中心に次の視点から資料収集する。

- (1) 首都東京の視点から、東京都現代美術館の常設展示が、我が国の文化的自己表現となるように、日本の美術の優れた作品を収集する。
- (2) 国際都市東京の視点から、東京都現代美術館が国際文化の拠点となるように、友好都市を含む諸外国の作品を収集する。欧米のみならずアジア等、世界各国の作品も収集する。
- (3) 現代社会における美術表現の多様化に対応するために幅広い分野で収集する。
- (4) 現代の美術がどのような変遷をたどって生まれてきたかを知る上で必要な近代の作品を収集する。
- (5) 収集は、次項の方針に基づき計画的に行う。

「3 収集方針」でございます。

「(1) 収集対象」といたしまして、

ア 日本の現代美術の作品及びそれらを明確にとらえるために必要な、友好都市を始め

とする現代の欧米、アジア等の作品

イ 現代美術の形成を考える上で必要な近代日本及び海外の作品
となっております。

「（２）収集分野」でございますが、アからクまでの項目に分かれております。

アが、絵画・版画等、平面芸術。日本画、油彩画、水彩画、素描、版画等がこれに含まれます。

イといたしまして、彫刻等、立体芸術。木彫、石彫、ブロンズ、インスタレーション等はこちらに属します。

ウ、映像メディアによる造形表現、写真、ビデオ、フィルム、コンピューター映像等の作品がこちらに該当いたします。

陶芸、染色、ガラス等につきましてはこちらのエの工芸に含まれております。

オ、デザイン。印刷デザイン、工業デザイン等がこちらに含まれております。

カ、建築、図面、模型、記録写真等としております。

キがその他の造形系術となっております。

このほか、クといたしまして、模写ですとか下絵、作家の旧蔵の図書資料ですとか手紙類、パフォーマンスの映像記録等に関しましては、二次資料として作品と分けて位置づけております。

「４ 収集方法」でございますが、

収集は、購入、寄贈及び寄託等によるものとする。収集に当たっては、学識経験者を中心とした「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会」の意見を聞くものとする。
となっております。

次ページですけれども、「収集に当たっての具体的な考え方」でございます。

東京都現代美術館の常設展示の一層の充実のために必要な作品を、次のように収集する。

- 1 日本及び海外作品とともに、「絵画、版画、彫刻及び映像メディアによる造形表現」を主たる収集対象とし、「工芸、デザイン、建築等」へと広げる。
- 2 評価の定まった作品及び展覧会（個展、コンクール展、東京都現代美術館の企画展、海外の国際展等）で高い評価を受けた作品を重視する。
- 3 常設展示において日本及び海外の戦後美術の流れを見せる際に、欠落していると考えられる流派、作家、作品については特に配慮する。
- 4 海外の作品については、欧米美術に留まらず、アジア地域及びラテン・アメリカ、アフリカ等他の地域へと対象を広げる。
- 5 同時代の美術を育成するという視点から、若手作家の作品を積極的に評価、収集の対象とする。
- 6 来館者にとって魅力のある美術館とするために、敷地内に屋外彫刻を設置する。また、東京都現代美術館でなければ観られないユニークな作品の制作委託を積極的に推し進める。

となっております。

こちらの収集方針に決めました、「3 収集方針」の中に対象と収集分野がア、イ及びア〜クまでの項目に細分化されておりますけれども、これから御説明いたします資料3の作家・作品説明書の中の右側のほうに「該当する規定」という欄がございますけれども、こちらに記しております3の(1)ア、(2)イ等という表記は、収集方針のどれに該当するかというのを示したものでございます。

それでは、お手元の資料3の作家・作品説明書及び資料2の収集候補作品一覧表に沿って御説明させていただきます。

それぞれの作品の御説明をさせていただきますけれども、参考価格につきましては、後ほど作品実見の際に御案内をさせていただきたいと思います。

まず、1番と2番ですけれども、今回、4作家9作品が対象になっておりまして、そのうちの1番と2番、マーク・マンダースの作品を挙げさせていただいておりますが、詳細につきまして、当館の鎮西より御説明させていただきます。

担当学芸員：それでは、マーク・マンダースの今回の候補作品について御説明申し上げます。

マーク・マンダースは1968年、オランダのフォルケル生まれです。アーネムの芸術学校で学んだ後、現在は主にベルギーのロンセを拠点に活動をしています。

昨年のあいちトリエンナーレなどでも紹介されておりますので、記憶に新しい方もおいでかと思いますが、独特の世界観を背景として、数多くのオブジェや彫刻をつくることでよく知られております。

この作家はもともと、マーク・マンダースという自分と同じ名前の主人公による一種の自伝のような小説を書くということを手がけていたそうですけれども、1986年にこのような試みの一環として、架空の建物の見取り図を制作して以来、想像上の部屋に置かれる作品を、オブジェや彫刻として制作し、一連のインスタレーションとして発表を続けるという仕事をしています。

結果、そういった背景を持っていますので、全ての作品が相互に関連を持ち、かつ、世界観を共有してつくり上げていくといった作風になっています。

1994年にはアントワープ現代美術館で個展をしまして、その後サンパウロやベネチアのビエンナーレなど、国際展に参加、各国の主要美術館で収蔵されたり、あるいは個展、近年は大型の野外彫刻のプロジェクトも手がける予定になっております。

今回、マーク・マンダースの作品で候補とさせていただきたい作品が2点ございまして、まずは1番の「Dry Figure on Chair」という作品です。

マンダースの立体作品は、彫刻に家具ですとか日用品、建築部材などを組み合わせて構成されることが多く、本作品もその好例と言えるかと思います。その施策においては、今、述べましたように、架空の建物に基づいた「建物としてのセルフポートレイト」という言い方を本人はしているのですけれども、ある種、虚構的、あるいは決まった時間を持たな

い、無時間的な姿を前提とするために、作品それぞれがいつつくられたかはっきりしない、数日前の作品と24年前につくった作品との違いが全然ないように見せたいという意図を持って、それぞれが非常に意識的につくられています。

今回、ごらんいただく作品は、特にそれをつくった状態のまま放置をして、乾燥してしまった状態を実現することが試みられた作品となっています。

作品のひび割れた粘土のように見える部分ですとか木材というのは、非常にもろそうに見えるのですが、これらはブロンズが着色された物になっておりまして、実際はエディションを持つ作品となっております。今回対象にしておりますのは、そのうちの3分の3です。型としては同じエディションなのですが、それぞれに彩色が施されて、もたれかけている椅子というのも若干違いますので、エディションがありながらユニークな性格も持っている作品と言うことができます。

続きまして、作品番号2番の候補作品ですが、こちらは「Perspective Study（パースペクティブ・スタディ）」という一連の作品のうちの1点になります。ごらんいただきますと、新聞をモチーフにしているのですが、このような新聞にかかわる作品も、マンダースの作品を特徴づけるものとして、継続的に試みられているものとなります。

この素材ですが、もともとは別作品の素材として、パピエ・マッシェ、張り子をつくる時に新聞紙を使おうとしたことがあったそうですけれども、彼の作品の前提となるものが、特定の時空間を離れた世界観であるので、全ての作品において何か特定できる日付や地名を排したいということから、自分でフェイクの新聞をつくり始めたのが、この新聞のシリーズのきっかけとなっております。

英語の辞書から単語を取り出して、それをランダムに組み合わせたもので実際、テキストとしての意味は読み取ることができないものになっています。

本作は、アルミの板と金網をベースにしまして、その上にフェイクの新聞を何層も張り合わせてできている作品となっております。事実に基づくはずの新聞をイマジナリーな架空のものに変換していく一方で、後でごらんいただきますが、物として非常に強い存在感を持たせているということで、マンダースの作品の特徴をよく伝えるものと言っていると思います。

作家は、同時に、美術出版社の『ローマ・パブリケーション』にもかかわってまして、作家と共同で本を出したり、展覧会を企画したりもしています。ですので、詩であるとか、言葉、単語とその組み合わせというものは、マンダース作品においてとても重要な要素を占めているということができると思います。

この2点を今回、候補とさせていただいておりますが、その理由としまして、当館では、これまで、同時代の特に海外作家の作品について、現代性であるとか国際的な評価を参考にしつつ、コンスタントに紹介をし、収蔵してまいりました。

マンダースも同様に、今日、非常に高い注目を集めている作家の一人であるとまずは捉えられるかと思っています。その中でも、とりわけ架空のセルフポートレートですとか、偽の

新聞といったように、歴史や社会に対しての批評性を持ったコンセプチュアルな要素、こういったものが特に現代の作家にはとても親しみあるテーマではあるのですが、そういうものを背景に持ちつつ、彫刻を内側から更新していくような造形を伴っている、そういった魅力があるということが非常に大きな特徴であると考えまして、同時代の美術を概観する上で欠かすことのできない作家の一人であるということで、今回、候補とさせていただきます。

今回、タイプの異なる2点が収蔵となることで、その個性が十分に伝えられるのではないかと考えております。

また、今まで申しましたように、いろいろな視点が多角的、重層的に含まれていることから、単独ではもちろんのこと、収蔵作品とのさまざまな組み合わせも将来考えられますし、何よりも質の高い造形というものが、作品を見るという体験の意味ですとか魅力といったものを来館者に広く伝えることができるのではないかと考えております。

以上の理由で、今回のこの2点を候補とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

牟田事業係長：続きまして、3番のサレ・フセインの「アラブ党」というカンバス100点組の作品でございますけれども、詳細につきまして、当館の西川より御説明させていただきます。

担当学芸員：サレ・フセインは、1982年生まれのインドネシアの作家です。ジャカルタの大学で絵画を専攻しまして、絵画を中心に壁画やプロジェクションなど、さまざまなメディアを用いて制作をしています。

彼は、サウジアラビア出身のアラブ系のインドネシア人でして、これまでも自分自身の家族の歴史をたどるような作品をつくってきました。彼の祖先であるアラブ系ディアスポラというのは、古くからインドネシアに定住していたのですが、オランダ植民地のもとでは外国人と見なされていまして、権利を制限されてきたという歴史があります。フセインは祖先の歴史を調べていくうちに、1930年代、インドネシアのオランダからの独立運動の時代に、それまで外国人と見なされていたアラブ系の人たちが、自分の生まれた土地こそが母国であるという理念のもとに独立運動に加わったという事実に出合います。そういった事実に対してのリサーチを通じて本作を描いています。

見つけてきた写真資料の中から、断片的に場面を拾いまして描かれた100点の絵画で構成されています。クローズアップや余白を多く含む画面の集積で複数の個人が経験したであろう歴史を想像させる。それと同時に、全体としては明確な像を結び合わさないという点で、大文字の歴史では語り切れない歴史の表象不可能性をも示しているかと思います。

この100点組の作品は、当館で開催いたしました「他人の時間」展、その後、大阪の国立国際美術館、シンガポール美術館、オーストラリアの美術館などを巡回いたしましたけれども、「他人の時間」展で出品した作品になります。

当館では、1997年にインドネシア、フィリピン、シンガポールなど、東南アジア5カ国

の作家に焦点を当てた展覧会を開催しており、その際に出品したアジアの作家の作品を多く収蔵しております。その流れをくんで、社会や歴史と自分自身の関係を探るようなアジアの作家の作品、その新しい世代の動向をアップデートしていくためにも、サレ・フセインの作品を当館のコレクションに加える意義があると考えております。

牟田事業係長：続きまして、4番、当館収蔵作家の中村宏先生からの6点組の絵画作品でございます。詳細につきまして、鎮西から御説明させていただきます。

担当学芸員：こちらは、中村宏の「明暗法からの視線」というタイトルの作品になりました。6点組になっています。

中村宏さんにつきましては、皆さん御存じかと思います。1932年に静岡県浜松市で生まれまして、いわゆる「ルポルタージュ絵画運動」を起点とし、鑑賞を含む絵画を成り立たせる条件や問題について、絵画でもって試行するという一貫した姿勢を続けていらっやって、現在も精力的に制作をされています。

2007年には当館で回顧展を開催しまして、当館の図書室では「中村文庫」という形で旧蔵書や関連資料、スクラップブックなどを多数公開しています。

現在、当館では作品を9点、二次資料を20件所蔵しております。

その中で、今回幾つか御寄贈のお申し出をいただきまして、こちらの作品がその中の絵画の1点ですけれども、中村先生の作品は、鑑賞ということ自体を画面に取り込んで、絵画の成り立ちを考えていくということを課題としているのですけれども、そのために、絵画史の中のさまざまな要素を試みていくというのも一つの大きな特徴になっています。

この作品では、タイトルにもありますように、非常にベーシックな「明暗法」というものを提示しているのですけれども、作家本人の言葉によりますと、これは「リアリズムの再利用」と言っております。ぱっと見た感じ、目の中に入ってくる非常に明るいフラットな黄色の面と、古色めいたリアリズムの対比というのが、自分の作品を近代が現代に潜り込んでできた溝だと自称する作家にとっては、そういった傾向、思考を示す一つのものだとも言えるかと思います。

また、一見、肖像画のように見えるのですけれども、近代と現代という作家の言葉を受けて考えますと、これも肖像画をそのまま肖像画として描いたものではなくて、記号的に用いて描いたと本人は言っています。確かに、それを示すかのように、顔が全部フレームで途切れていまして、独特のリズムをつくっている作品になります。

後で実見していただきますと一層わかるのですが、幾つかは映画女優の写真をもとに描かれたものでして、作家は当初から映画に非常に関心を抱いていたのですけれども、そういった映画へのオマージュといった趣も感じられる作品になっています。

そういう意味では、作家の意図を直接感じ取ることができる作品と言えるのではないかと思います。

収蔵の理由といたしましては、まず、この作品は、これまで作家が積極的に作品の中ではかかわることを避けていた「リアリズム」にかかわる一つの姿勢として一考に値すると

ということが挙げられると思います。こちらを収蔵することで、映画ですとか、絵画技法と時代といったような、作家が持っている関心の進展とか展開を補完できると考えます。

写真のイメージに取材しているという点では、当館が所蔵しております《絵図連鎖》というコラージュ作品との関連も指摘できますし、まとめてあるコレクションを補完するという意味と、さらに、一緒に展示するということでも、いろいろ広い活用が今後も期待されるのではないかと考えております。

以上です。

牟田事業係長：続きまして、ナンバー5から9までの5点の作品につきましては、オノサト・トシノブの作品でございます。

オノサト・トシノブの作品につきましては前回の平成28年度第1回の部会でもお話しさせていただいております。

オノサト自身につきましては、今さら改めて御説明する余地もないのですけれども、1912年に長野県で生まれまして、以後、活動の舞台を群馬県桐生市において、そこで画業に一生を費やした方でございます。

一般的に、オノサトといいますと、50年代半ばごろより始まりました、いわゆる「ベタ丸」のシリーズが大変よく世には知られておりますが、一貫して御寄贈いただいている中には最初期の30年代後半から40年代にかけての非常に貴重な初期の具象画なども含まれておりまして、オノサトの画業を改めて振り返る上で重要な作品がこれまでに当館には収蔵されております。

今回につきましては、40年代から50年代にかけての初期の抽象の油彩画が3点ございまして、その他版画作品、これまでのコレクションを補完するような「ベタ丸」の全盛期の時代の水彩画の作品ですとか、版画作品、珍しいところではマルチプルの作品を1点今回は御寄贈を御提案いただいております。

今回の御寄贈によりまして、当館のオノサト作品は合わせて115点を数えるに至ります。油彩画54点、水彩画23点、版画38点という内訳になりますけれども、当館のコレクションの中でもこれだけ一人の作家の作品のうち、最初期から最晩年に至るまでのその時々为代表的な作品がバランスよく網羅されているという事例は希有なことございまして、美術館としては非常にありがたいことであると思っております。

オノサト自身は日本の抽象絵画の先駆的な画家としまして、当館が扱う戦後美術の中でもやはり極めて重要な作家であると認識しておりまして、これまでに御寄贈いただいたことで形成されているコレクションをさらに補完する位置づけにある今回の作品の御寄贈につきましても、非常にありがたいことと認識しております。

作品の御説明につきましては、以上になります。

何かいままでのところで御質問等ございますでしょうか。よろしいですか。

また作品をごらんいただきました後で、御質問等がありましたら、お受けしたいと思います。

富岡文化施設担当課長：それでは、これから作品を実際に検分をしていただきますので、皆様、こちらのほうに場所の御移動をよろしくお願いいたします。

（委員離席）

（作品検分）

（委員着席）

富岡文化施設担当課長：ごらんになって、改めて何か御質問などはございますか。とりあえず大丈夫でしょうか。

それでは、念のため、評価方法を説明させていただきます。

お配りしています評価表に金額と署名をしていただきます。評価額の最高価格と最低価格を除いた残りの平均値を評価額とさせていただきます。金額は税込みで御記載ください。ボールペンで記載のほうはよろしくお願いいたします。

記入が終わりましたら、合図していただきましたら、係員が回収させていただいて、確認させていただきます。確認終了後、御退席いただいて結構でございます。確認が終わり次第、評価も終了ということになります。

先ほども申し上げましたが、お帰りになる際、資料は机の上に置いたままにしていいただければと思います。

それでは、評価をよろしくお願いいたします。

（評価書記入）

（委員退出）

午後 3 時 4 分閉会

以上